

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	小林 春樹
論文題目	『漢書』の構造と董仲舒
審査要旨	
<p>漢代において、儒教がいつ国教化されたのかをめぐっては、多くの意見が並存している。</p> <p>かつて福井重雅は、『漢代儒教の史的研究』において、『漢書』董仲舒伝と『史記』董仲舒伝とを比較することにより、『漢書』の偏向を明らかにした。また、渡邊義浩は、『後漢における「儒教国家」の成立』において、儒教の国教化は、後漢の章帝期に行われた白虎観会議を画期とし、後漢「儒教国家」の成立とともに達成された、と主張した。</p> <p>こうした先行研究を承けて、本博士学位請求論文は、『漢書』の史料批判を通じて、『漢書』の本来の執筆意図を解明しようと試みた。本博士学位請求論文の論証によれば、『漢書』は、前漢の必滅性の証明と王莽の閏位性を闡明にするとともに、光武帝劉秀の登場と後漢の成立の必然性を証明することを著述目的とした史書である、という。</p> <p>前漢の滅亡は、従来言われていたような元帝期より始まるものではなく、成帝期を画期とし、『漢書』外戚伝・元后伝・王莽伝などの多くの紀伝において、成帝を亡国の君主として描いている、という。また、『漢書』はこれまで、前漢国家のオードとされることが多かったが、『漢書』外戚伝・元后伝・王莽伝などの多くの紀伝では、前漢国家の必滅が述べられている。すなわち『漢書』は前漢にとって亡国の君である成帝の言行や姿勢によって外戚の王氏が台頭し、最終的に王莽の篡奪によって前漢が実質的に滅亡したことが事実として述べられる。王莽と新もまた、その滅亡が不可避か必然の閏位の皇帝として描かれる。そして、両者のあとをうけて登場し成立した光武帝劉秀と後漢こそ、真に神聖な王朝と描かれている、と主張する。</p> <p>本論文の前半を構成する『漢書』篇は、上記のように、『漢書』という著作が、第一に、「前漢」王朝の必滅性を論証する（第一章～第六章）一方において、「前漢」王朝を篡奪して登場し成立した王莽と「新」王朝をも閏位の「帝王」と「王朝」としてそれらを否定、否認（第二章～第五章）したうえで、第二には、「前漢」王朝を篡奪した王莽と「新」王朝を「駆除」することによって登場し、成立した光武帝劉秀と「後漢」王朝こそ、「堯後火徳の聖帝たる高祖」の正統を継ぐ、真の「聖帝」と「神聖王朝」であることを闡明し、称揚した「後漢王朝頌歌」の書である（第四・六章）ことを論証したものである。</p> <p>そして、福井重雅により解明された董仲舒の偏向は、こうした『漢書』の執筆意図と整合的な関係のなかで構築されたものである、とするのである。</p> <p>本論文の後半を構成する董仲舒篇の諸章の考察とその結果によれば、『漢書』の[董仲舒像]は、第一に、所謂「儒学の官学化」を実現した大儒としてのそれではなく、筆者が「三段階論的災異説」と命名した災異説を提唱するなどした『春秋』災異学者としてのそれを基本とするものであった。第二に、そのような[董仲舒像]は、「五行志」の災異解釈や、諸王や諸帝の評価に「基準」を提供する存在として一定の「権威」を承認されるとともに、成帝を「亡国の君」、「前漢」を「必滅の王朝」と見なす『漢書』の皇帝観と前漢王朝観、さらには『漢書』自体とのあいだに「整合的」関係を有している可能性を有するものであった。</p>	

氏名 小林 春樹

こうした内容を持つ小林氏の博士学位請求論文に対して、副査の工藤元男先生からは、行論の論理性や資料の読解に関する質問が、田中麻紗巳先生からは、前漢の頌歌ではなく、「後漢王朝への頌歌」であったとする主張と、成帝を亡国の君主と描く、という小林氏の主張の根幹に関する疑義が提示されたが、小林氏のそれに対する回答は、十分な論理性を持つもので、小林氏の独自の主張を際立たせることになった。主査の渡邊義浩からは、渡邊説との相違の確認が行われ、そののち、審査会に出席していた他大学の教員からの質疑が行われたが、小林氏はそれに論理的に応答した。

『漢書』董仲舒伝の理解は、単に史学の問題に止まらず、儒教の国教化の問題と関わる重要な問題である。その解明を目指した本論文は、博士学位の授与にふさわしい論文である。

公開審査会開催日	2019年 2月 27日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	渡邊 義浩	中国古代思想史	博士(筑波大学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	工藤 元男	中国古代史	博士(早稲田大学)
審査委員	日本大学・元教授	田中 麻紗巳	中国古代思想史	博士(九州大学)
審査委員				
審査委員				